山口講堂

文教都市山口

江戸時代後期、各藩では財政難を打開すべく藩政改革が行われた。その中で、教育は改革の重要な軸のひとつとみなされ、相次いで藩校が創設された。幕藩体制の揺らぎに対応することができ、同時に時代を見据えた政策を推進できる、有為な人材の育成を期待していたためである。

周防と長門を統括する萩藩もまた、国家興隆の基盤は教育にあるとし、全国に先駆け、藩校明倫館を中核に、領内のいたるところに郷校、寺子屋、私塾等を設けた。教育内容は、明倫館のものを範とし、まさに教育立国の様相を呈していた。

山口大学の淵源にあたる山口講堂も、このような時代の象徴的存在として設立された。

山口講堂が造設されたこの山口は、今もって文教都市として語られる町である。山口が歴史の表舞台に登場するのは室町時代になってからである。それまでは一農村に過ぎなかったが、守護大名・大内弘世が京の都に似ていた山口の地をたいそう気に入り、居を構えたことが転機となった。京都文化の移入のため、多くの文化人が大内氏によって庇護されると同時に、大陸からの先進文化も受容されたため、「大内文化」が花開いた。ここに文教都市・山口の基盤ができあがった。

大内氏の足跡を継いだ毛利氏の時代も、山口は治世上の要塞として萩、三田尻と並び「三市」と称され、萩の明倫館、三田尻の越氏塾（えっしじゅく）、そして山口の山口講堂と、修学の道が開かれたのは必然の事であった。

五重塔

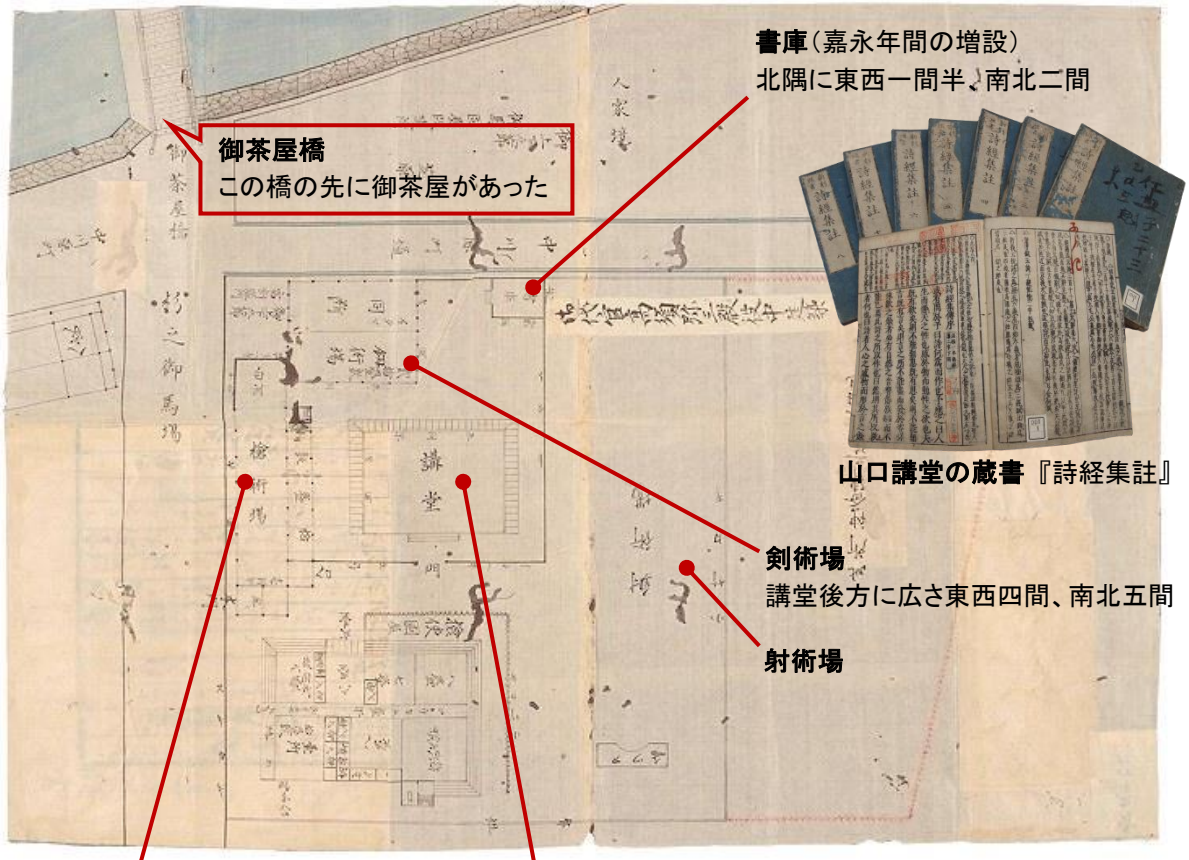
山口講堂の造設

山口講堂の扁額

萩藩士・上田鳳陽（茂右衛門）は、寛政12（1800）年11月、萩に遊学して藩校明倫館に入り、学頭・繁澤規世に師事した。文化6（1809）年11月まで、9年の長きにわたり在学し、儒学、国学を専攻した。明倫館での修学を終えた鳳陽は山口に帰郷し、在住諸士の教育にあたった。しかし当時の山口には学問所はなく、書籍も乏しかったため、文化12年2月、学舎の建設を発起したのである。

鳳陽は、当時の明倫館の学頭・中村九郎兵衛を通じ、「山口の町に武芸の稽古場、馬場はあるものの、いまだに本格的な学問所がないため、自力でも学問所を開設したい」と、藩に申し立てを行った。藩はこれを受け、建築用材を藩有林から採取することを許可するとともに、資銀も下給し、中村九郎兵衛にもその事業を援助させた。山口の豪商や周辺の豪農らの協力も相次ぎ、4月、中河原の山口御茶屋（藩主の参勤や領内巡視及び他藩役人との応接のために設けられた公館）の前方に、講堂が落成し、これを「山口講堂」と呼んだ。講堂は今の山口公設市場の位置に建てられた。古地図によると、藩の役の「検使小屋」の敷地の一部に講堂があり、正面幅が約10m、奥行きが7．3mで三面に回縁のついた小規模な平屋だったようだ。

山口講堂剣鎗射術場并検使子固屋共地差図（山口県文書館所蔵）



基を文化の遠きにおきて

講堂造設後の文化12（1815）年4月、藩主・毛利齊熙（なりひろ）は氷上山興隆寺参詣の途中に、山口御茶屋で在住諸士の文武諸芸を観閲した。鳳陽の門弟の河野喜兵衛以下18名が孫子の軍形篇、孔子の家語観周篇並びに詩経の講釈をし、平岡弥三右衛門らの門弟80名がそれぞれ武芸を披露したという。翌日には馬術、騎射、打毬等を演じた。山口講堂の開設を機として行われた催しではあるものの、藩主もこの講堂開設を奨励していたことが窺われる。以後、山口来訪時や江戸参勤の帰途などには、藩主が山口講堂の門弟の勉学を観閲することが慣例となり、萩明倫館・三田尻越氏塾と共に書籍も下賜されるようになった。

こうして山口講堂はこの地で重要な教育機関として時を刻み、山口における教育の礎を作った。山口大学8学部中、最も古い歴史を持つ経済学部の前身「山口高等商業学校」の校歌には次のようにうたわれている。

仰ぐは鳳翩臨むは椹野　基を文化の遠きにおきて
時世の進みに伴ひ来る　山口高等商業学校

ここにある「文化」は、すなわち山口講堂の開設された文化12年を指している。山口大学の基となる山口講堂から200年。その志は山口大学へとつながっている。

講習堂周辺ー現在の面影

山口講堂跡
山口公設市場（平成 24（2012）年に解体）。この中ほどに講堂が建っていたようである

山口御茶屋跡
現在のクリエイティブスペース赤レンガ付近
御茶屋は参勤交代の際の休憩所として使用されていた

御茶屋橋
名のみが残り歴史を伝えている